九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

遠山隆淑著『「ビジネス・ジェントルマン」の政治学 : W・バジョットとヴィクトリア時代の代議政治』

朝倉, 拓郎
九州大学大学院法学研究院 : 協力研究員

https://doi.org/10.15017/26469

出版情報：政治研究. 59, pp.65-67, 2012-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

遠山隆淑著

『「ビジネス・ジェントルマン」の政治学――W・バジョットとヴィクトリア時代の代議政治――』

（風行社、二〇一一年、二八四＋vii頁）

ウォルター・バジョット（Walter Bagehot, 一八二六―七七年）は、『イギリス国制論（*The English Constitution*）』（一八六五―七七年、以下『国制論』）の著者として有名であるが、従来の先行研究のほとんどはこの『国制論』に関心を集中させ、バジョットは「同書において、『尊厳的部分（the dignified parts）』の議論を提出することにより、大衆民主主義体制下における政治的服従の獲得および政治指導の問題に取り組んだ思想家」（一二頁）として解釈されてきた。これに対して本書は、『国制論』以外の浩瀚な著作群を検討対象に加え、それらを選挙法改正をめぐる論争の中で展開された政治的リーダーシップ論という観点から検討することによって、新たなバジョット解釈を提示している。以下、各章ごとに本書の概要を紹介する。

第一章「国民性と政治」では、まず、代議政治を可能とする国民の「性格（character）」に関するバジョットの議論が検討される。バジョットによれば、名誉革命以後のイギリスでは、代議政治を通じた「自由な統治」が概ね成功を収めていたが、それを可能にしたのは、彼が「ウィッギズム（whig-gism）」と呼ぶところの「性格」を有した人々が、常に政治支配者層を形成してきたことによる。ここでいう「ウィッギズム」とは、ウィッグの党派的信条のことではなく、「精神の『均衡』を備えながら、なおかつイギリス政治社会を改善し発展させることができる」（二九頁）資質を意味している。

第二章「政治支配者層の再編」では、ヴィクトリア時代中葉において必要とされる政治支配者層についてのバジョットの主張が検討される。それによれば、バジョットは、従来の政治支配者層であった地主階級に加えて、新興の上層中流階級が参入する方向での政治支配者層の再編を主張した。この上層中流階級は、従来の政治支配者層が有していた土地財産と古典的教養を欠いているが、これに代わるものとして、「ビジネス財産（business property）」と「ビジネス教養（business culture）」を備えている。バジョットは、このような上層中流階級と「ビジネス教養」を身につけた一部の地主階級を「ビジネス・ジェントルマン（business-gentleman）」と呼び、彼らを新しい時代に適合した政治支配者層として位置づけた。なぜなら、「『ビジネス教養』は、『ウィッギズム』という性格を有している人々にこそ保持が認められるもの」（九六頁）だ

からである。

第三章「ビジネスとしての政治」では、「ビジネス・ジェントルマン」によって遂行される政治運営の具体的なあり方に関するバジョットの議論が検討される。バジョットは、ヴィクトリア時代中葉において政府の扱う業務量は激増したため、政治家には膨大な「細目事項（detail）」に責任感を持って取り組む「真摯さ（earnest）」が要求されると主張する。また、安定的時代には調停型の管理運営者、改革の時代には統率型の管理運営者が必要であるとし、時代状況に応じた政治的リーダーシップ論が展開される。

第四章「信従心の国制―イギリス国制と下層労働者階級」では、これまでの議論に基づいて、『国制論』に込められたバジョットの政治的意図が解明される。バジョットは、無知蒙昧で政治的能力をまったく欠いている下層労働者階級に選挙権が与えられることに反対し、君主を中心とする「尊厳的部分」に対する彼らの信従心を利用して彼らを統御することを提案した。そして、『国制論』におけるバジョットのこうした提案は、下層労働者階級からの自発的な服従を期待できない「ビジネス・ジェントルマン」に対して向けられた政治支配者教育論であると本書は主張する。

第五章「『真の世論』と政治の目的」では、「ビジネス・ジェントルマン」による政治が準拠すべき「真の世論」についての検討を通じて、バジョット政治学の特徴が明らかにされる。「真の世論」とは、様々な意見の調整過程を経て、政治支配者層がつくり出す見解のことであるが、実質的には、「穏健な政治家たちに共有される『性格』としての『ウィッギズム』の具体的発現」（二〇頁）に他ならない。したがって、バジョットが提唱した「ビジネスとしての政治」とは、「有権者個々人の多様な要求を集約した結論として政治的運営方針が決定されるような、大衆民主主義時代の管理運営ビジネスのことではなく、「名望家支配の政治像を基調として、イギリスの国家的成功の要諦を引証基準にすえながら、現実の具体的政策を導き出していく方法を探り出すことをめざしたリーダーシップの政治学であった」（二五二頁）、と結論される。

本書は、『国制論』を含めてバジョットの時局的な論説の集積の中から、バジョット政治学の統一的な解釈を導き出すという困難な企図に挑戦し、大きな成功を収めている。それを可能にした要因の一つとして、本書が、選挙法改正をめぐって提議された政治支配者層の再編問題という論点に着目したことが挙げられるであろう。なぜなら、著者が「はじめに」でも述べているように、この問題を追究することは、たんに誰が、あるいはどの階級が政治的リーダーになるかという問

題だけでなく、政治家の持つべき資質やリーダーシップのあり方、有権者層との関係といった諸問題を有機的に結びつけ、最終的には、その思想家が持っている「あるべき政治社会の全体構想あるいは思想家の政治思想総体」（九頁）を問うことにつながっていくからである。そしてさらに、この有機的な問いのつながりは、我々自身の政治社会のあり方をめぐる省察へと読者を導くであろう。

（朝倉拓郎）

バーナード・クリック著、関口正司監訳、大河原伸夫、岡崎晴輝、施光恒、竹島博之、大賀哲訳

『シティズンシップ教育論――政治哲学と市民――』

（法政大学出版局、二〇一一年、ix＋三一七頁）

Bernard Crick, *Essays on Citizenship*, Continuum, London, 2000.

本書の著者バーナード・クリック（一九二九―二〇〇八）は、イギリスの著名な政治学者であると同時に、労働党のブレア政権期において、シティズンシップ教育に関する諮問委員会の委員長として活躍したことでも知られている。（この委員会の答申は、『一九九八年報告』（クリック・レポート）としてまとめられた。）このような彼の活動は、二〇〇二年に「シティズンシップ」科目がイギリスにおける義務教育カリキュラムに導入されるという形で結実した。

本書は、政治教育、シティズンシップ教育に関してクリックが発表してきた新旧のエッセイを一冊にまとめたものである。本書のこのような性格上、各エッセイはそれぞれ独自の主題と文脈を持ちつつ、著者の一貫した主張が重複して登場する箇所も多い。以下では、本書に含まれる主要な内容を、大きく三つに分けて概観する。

第一の内容は、シティズンシップ教育が前提とする政治観と市民像に関する著者の主張である。著者が考える政治とは、「相異なる利益の創造的調停」（五八頁）であり、ここでの利益とは、物質的なものも精神的なものも含まれる。また市民とは、そのような活動を遂行するための政治リテラシーを身につけた能動的市民である。このような政治観、市民像は、著者の考える「政治的伝統」に根ざしたものであり、それは「自由な市民どうしの公開の議論で、紛争を解決し政策を決定する活動」（二七五頁、傍点原著）を意味している。著者によれば、このような政治的伝統は、世界にとって「最善の希望」であると同時に、我々の文明を破壊しかねない長期的問題が次々と蓄積している現在においては「最後の希望」でもある（二七六頁）。